

ゴォ・ヴァン・チェウ(Ngo Van Chieu)とカオダイ 教内教心傳(N?i Giao Tam Truy?n)

著者	津 茂
著者別名	TAKATSU Shigeru
雑誌名	アジア文化研究所研究年報
巻	52
ページ	101(266) -122(245)
発行年	2017
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00009919/

ゴォ・ヴァン・チュウ (Ngô Văn Chiêu) と カオダイ教内教心傳 (Nội Giáo Tâm Truyền)

高 津 茂^{*}

キーワード：ゴォ・ヴァン・チュウ、ゴォ・ミン・チュウ、カオダイ教、
カオダイ・チュウ・ミン・ヴォ・ヴィ、カオダイ内教心傳、

はじめに

筆者は、これまでカオダイ教の聖典についてとカオダイ教の歴史を各宗派の分派理由を含めて専ら考察してきた⁽¹⁾。政治的には、解放前まで親仏・親日・親米路線をとったタイニン聖座派と親解放勢力に組した連交カオダイの各宗派に分かれている⁽²⁾ように見られるものの、宗教的には神意を伺う方法としてサイ・バンと扶鸞(扶乩)という基本的な違いが創設当初にはあった⁽³⁾。

本稿がまず最初に対象とするのは、ゴォ・ヴァン・チュウ (Ngô Văn Chiêu)・法名はゴォ・ミン・チュウ (Ngô Minh Chiêu) がこのフォ・ロアン(扶鸞)によって神意を伺うティエン・コォ(仙機Tiên cơ)やダン・コォ(壇機Đàn cơ)によって菜食と修業が求められ、次いでカオダイの教えが少しずつ降されていく過程を追い、無為の教えとしての自己救済の道、すなわち現在でいう「内教心傳」の特質を明らかにする。次いで、サイゴンでサイ・バンによって神意を伺っていたカオ・クウイン・クウ (Cao Quỳnh Cư), ファム・コン・タック (Phạm Công Tắc), カオ・ホアイ・サン (Cao Hoài Sang) グループがゴォ・ヴァン・チュウの教えに触れ、ゴォ・ヴァン・チュウを長兄と敬いつつも無為の教えとして退け、普度という衆生の済度を名目にカオダイ教

の実権を得て、ゴォ・ヴァン・チュウには教宗の地位をも辞退させ、宗教教団カオダイ教発起人⁽⁴⁾の本来筆頭者であるべきゴォ・ヴァン・チュウを加えることなく、また教団創設の大礼「開道礼」に参加させることもなく創設に至った過程を明らかにする。この教団創設以前の無為と普度との対立を現在ではEsoterismとExoterismを援用して内教心傳 (Nội Giáo Tâm Truyền) と外教公傳 (Ngoại Giáo Công Truyền) として解釈している⁽⁵⁾。

カオダイ教の宗教団体としてのフランス植民地政庁による認可が1926年10月7日であり、開道の礼が組織されたのが同年11月18日であることから、カオダイ教の教えとしての創設が1926年であるかの誤解がある⁽⁶⁾が、本稿では1926年以前、ゴォ・ヴァン・チュウへのカオダイの最初の降臨過程からカオダイの教えがゴォ・ヴァン・チュウを通してカオダイ教チュウ・ミン・ヴォ・ヴィ聖会へと継承されていく過程を明らかにすることは、1926年以降のカオダイ教タイニン派を中心に継承された「外教公傳」の特質を逆照する意義を持つ。

なお、この間の代表的研究としては欧米では、ヴィクター・オリバーの概括的研究⁽⁷⁾やジェーン・スーザン・ウェルナーの急速なカオダイ教信徒数の爆発的な増加理由を社会経済史からの解析に力点を置いた研究⁽⁸⁾があるが、筆者は

^{*} taka@kpe.biglobe.ne.jp

ゴォ・ヴァン・チュウの事跡と歴史については以下の現地資料によった。

- ・『官夫ゴォ・ヴァン・チュウの歴史 (1878-1932) —カオダイ教創立者—』第4版, チャン・ミン・チャウ印刷所, サイゴン, 1956⁽⁹⁾
 - ・大道カオダイ チュウ・ミン・タム・タイン・ヴォ・ヴィ編『官夫ゴォ・ヴァン・チュウの歴史 (1878-1932)』, 宗教出版社, ハノイ, 2007⁽¹⁰⁾
 - ・フエ・カイ『ゴォ・ヴァン・チュウ 最初のカオダイ教徒』, 宗教出版社, ハノイ, 2008⁽¹¹⁾
- を中心に利用し, 1926年以前のカオダイ教の歴史については,
- ・ドン・タン『カオダイの歴史 大道三期普度 無為分』初版, カオ・ヒエン出版, サイゴン, 1967⁽¹²⁾
 - ・大道三期普度 大道教理普通機関 編『カオダイ教の歴史 卷一 開道 起源から, 開明まで』, 宗教出版社, ハノイ, 2005⁽¹³⁾
 - ・ドン・タン『カオダイ教の考察あるいはカオダイ教に関する国際大学知識層とのインタビュー解答』, カオ・ヒエン出版, サイゴン, 1974⁽¹⁴⁾
 - ・レェ・アン・ズン『潜在時期1920-1926のカオダイ教の歴史』, トゥアン・ホア出版, フエ, 1996⁽¹⁵⁾
 - ・国家社会・人文科学センター 宗教研究院 編『カオダイ教の初歩的考察』, 社会科学出版社, ハノイ, 1995⁽¹⁶⁾
 - ・ファム・ビック・ホップ『南部の人と在地の宗教』, 宗教出版社, ハノイ, 2007

上記以外のものについては, 注で示した。

1. カオダイ教誕生前のヴェトナム南部の政治・社会・宗教情勢

カオダイ教がその揺籃の地としたのは, ヴェトナム南部でありその在地的性格がカオダイ教の宗教的な骨格を規定していると筆者は考えている。即ち, メコンデルタを含めてヴェトナム南部は歴史が浅く, それ以前は専ら泥湿地とさ

れた地が17世紀になって開拓が進み, その住民の多くが流民もしくは移民であったし, 当初は華人 (明清の人) が少なくなかったものと思われる⁽¹⁷⁾。このことは, ミン・フウオン (明郷) を想起させるとともに, メコンデルタの西端のハ・ティエン (河僊) でも清の廣東の人である鄭玖が18世紀初頭に広南阮氏の河僊総兵となり移住して商港を開き栄え, 流民を集めた⁽¹⁸⁾。ハ・ティエンという名前の由来が川の上に仙人が出没したことから付けられた名前である⁽¹⁹⁾ ことも, 当地の文化を窺わせる。

フエ・カイ『カオダイ教を開いた南圻の地の文化的前提』⁽²⁰⁾によれば, 19世紀末の南圻の民族別人口 (括弧内は構成比) は, 1862-1888年間のヴェトナム人は1,629,224人 (88.7%), 華人は56,000人 (3%), クメール人は151,367人 (8.2%)。1895年では, ヴェトナム人1,967,000人 (88.4%), 華人88,000人 (3.95%), クメール人170,488人 (7.66%) であり, 19世紀の南圻の人口膨張の中心はヴェトナム人であったが, その増加率からすると華人が大きいことが知れる。その他にもチャム人も居り, 多様な宗教的な文化が混在していた。加えて, 南圻は北圻や中圻に比し三壇三廟の国家祭祀も19世紀半ばまでは行きわたってはいなかった⁽²¹⁾。加えて, 歴史が浅いために村落の祀神で神蹟を持ったものも北部に比べ極めて少ない特徴を持つ⁽²²⁾。祭祀を通しての支配や統制も少なく, 多様な宗教的文化を持つ南部ヴェトナムにフランスの植民地化に向けた占領と土地の没収が始まるのは1859年に遡り, グランディエール海軍中將がコーチシナ全域の永久的占領と全無主地の接収を宣言したのは1867年6月のことであった。この後およそ半世紀にしてデルタ開拓が本格化し, 国有地払い下げ制度により, 大土地所有制が成立し, 幹線運河の掘削とそれによる水田面積の拡大がより多くの流民を招き入れ, 社会的にも大きな混乱期に当たっていた⁽²³⁾。

このフランスの植民地化に抗して, 1885年の咸宜帝の抗仏勤皇大蜂起の檄以降, 激動の時期

を迎え、19世紀末には四恩孝義派の根拠地であったアン・デイン村は勤皇運動の根拠地でもあった。グウエン・ズイ・ヒンによれば⁽²⁴⁾、南部住民のフランス植民地主義への抵抗や反抗は伝統ですらあった。レ・アン・ズンによると、「20世紀初頭の南圻における政治状況は複雑極まりなく、激烈であり、以下のような大きな出来事があった；

- 1903：ファン ボイ チャウ (Phan Bội Châu) がここでの革命運動を調査するためにチャオドゥック (Châu Đốc) まで至った。
- 1908：フランスはミン・タン運動 (phong trào Minh tân) を弾圧する。
- 1913：畿外侯疆抵 (Kỳ ngoại hầu Cường Để) が南圻に至り3ヶ月滞在した。潘赤龍 (Phan Xích Long) が皇帝を自称し、サイゴン・チョロン地区で蜂起したが、大監獄 (khám Lớn) に収監された。
- 1914：ヨーロッパで、第1次大戦が勃発。
- 1915：フランスの敗戦。ドイツがパリを占領。この状態を利用して、独立を獲得するために、ヴェトナムにおける各愛国運動が活性化した。
- 1916：民衆がファン・シック・ロンを救い出そうとして大監獄を襲ったが失敗。南圻13省はひどく混乱したため、フランスは恐怖した。
- 1920：モーリス・ロン (Maurice Long) 全権は南圻植民地議会 (Hội đồng Thuộc địa Nam Kỳ) を組織した。いわゆる管轄会議 (Hội đồng Quản hạt (Conseil colonial)) である。この会議の場こそが、華人・フランス人の各資本家グループと南圻資産家との間の権利の奪い合いの場であった。この分断が新聞や雑誌にまで及んだとされている。」⁽²⁵⁾とある。

以上のような宗教文化的、社会経済的、政治的混乱とそのアノミーの中でカオダイ教は形成されたがゆえに三教同源の思想⁽²⁶⁾を基にしながらキリスト教をも包摂したユニバーサルな宗教として花開いたものであると筆者は理解している。

佳きにつけ悪しきにつけ求機や壇機を以って神意や靈意を伺う19世紀南圻の宗教的文化の中で色濃く影響したのが五支明道であり、カオダイ教が在地の宗教であったために1926年の開教以来年5万人を上回る信徒を獲得し10年を経ずして50万人を超えたのも、この五支明道の信者の多くがそのままカオダイへと入信したためと筆者は理解している⁽²⁷⁾。

2. ゴォ・ヴァン・チュウ小史

カオダイの神の最初の弟子となったゴォ・ヴァン・チュウの歴史は、チュウに下された神意をも記した2007年にカオダイ・チュウ・ミン・ヴォ・ヴィにより刊行された『官夫ゴォ・ヴァン・チュウの歴史 (1878-1932)』と、同名の書名の1954年に再版されたものが、共に下された詩も網羅的に掲載している。1954年版の前書きによると、「チュウ・ミン・ヴォ・ヴィは大道カオダイの内法心傳に属しており、他のいかなる道徳的機関とも連携してはいない。多くの方から問い合わせがあるため、師の歴史について1936年に出版した。」とあり、1954年版は1936年版の再版であることが記されている。1936年(丙子)の年は、カオダイが『大乘真教経 (kinh Đại Thừa Chơn Giáo)』を通して大乘心法 (Đại Thừa Tâm Pháp) を授けたとされる年である。チュウ・ミン・ヴォ・ヴィの壇機にはチュウは死後にあっても何度も降って教え、それが『大乘真教』というチュウ・ミン・ヴォ・ヴィ派の聖典となっているとされている。

本稿では紙数の制限もあり、ゴォ・ヴァン・チュウが最初のカオダイの神の弟子となり、教えを得るに至る背景としての個人史を本章で、内教心傳と言われる秘法の修得に至る過程は次章で扱うものとし、ゴォ・ヴァン・チュウの社会的な栄達の過程は表1に代えるものとする。

ゴォ・ヴァン・チュウは、戊寅の年1月7日、西暦1878年2月8日に、チョ・ロンの関聖寺 (Chùa Quan Thánh)⁽²⁸⁾後方の一軒の小屋で生まれた。1921年6月11日にハ・ティエンで発給さ

表1 ゴォ・ヴァン・チュウの公職時代 (1899-1931)

年	月 日		俸給 (ドン)
1899	3月23日	サイゴンの入国管理局 (Sở Tân đáo) で書記実習生となる	200
1901	7月14日	入国管理局三等副書記官に昇進	250
1903	1月1日	フランソワ・ピエール・ロジャー (Francois Pierre Rodier) 総督の時、南圻総督府に移動となる。エルネスト・アントワヌ・オウトレイ (Ernest Antoine Outrey) が南圻総督であった時に、ゴォ・ヴァン・チュウは総督府を離れた (1909年4月)	
1904	7月14日	南圻総督府で二等副書記官に昇進	300
1908	7月14日	南圻総督府で一等副書記官に昇進	480
1909	5月1日	タン・アン (Tân An) 省庁書記となる 母親に孝行を尽くすことができるようになった	
1910	7月14日	タン・アン省庁の三等正書記に昇進	540
1913	1月1日	タン・アン省庁の二等正書記に昇進	600
1916	1月1日	タン・アン省庁の一等正書記に昇進 さらに3年後には上級あるいは最上級書記に昇進したであろうが、チュウは知県 (trí huyện) の試験に転じた	660
1917	1月1日	二等知県の試験に合格したが、依然としてタン・アン省庁に勤務	
1919	11月15日	実母が他界した	
1920	3月1日	実母の (百日忌) 忌句が満ちた後、ハ・ティエン (Hà Tiên) 省での仕事に移動	
1920	7月14日	一等知県に昇進	およそ1222
1920	10月26日	フウ・クウオク (Phú Quốc) の郡主 (chủ quận) となる	
1924	1月1日	二等知府 (trí phủ) に昇進	1672
1924	7月29日	フウ・クウオク郡よりサイゴンに戻る。総督府での仕事に戻り、オーギュスト・トーランス (Auguste Tholance) 総督の時に第二局で公務に当たった	

出典：Huệ Khải：Ngô Văn Chiêu Người Môn Đệ Cao Đài Đầu Tiên, Nhà Xuất Bản Tôn Giáo, Hà Nội, 2008より作成

れたc.03007号のチュウの身分証明書には、1878年2月28日に誕生し、ミィ・トォ省トゥアン・チ (Thuận Trị) 總ディユウ・ホア (Điêu Hoà) 社をチュウの本籍地と記してある⁽²⁹⁾。

チュウは、父ゴォ・ヴァン・スウアン (Ngô Văn Xuân) と母ラム・チ・クウイ (Lâm Thị Quý) (1858-1919) (ラム・チ・ティエン (Lâm Thị Tiên)とも称した)⁽³⁰⁾の一人息子であった⁽³¹⁾。

6歳になって⁽³²⁾、両親がハ・ノイに働きに行かねばならなかったため、ミィ・トォにいる

父の妹のゴォ・チ・ダイ (Ngô Thị Đây) の下に預けられた。ダイの夫は華僑 (Hoa Kiều) であり⁽³³⁾、漢方薬や木材を商っていた。この家屋はディユウ・ホア社の村の行政機関の隣に位置する華人居住区に位置しており、上述したようにこの場所をチュウは自らの本籍として記している⁽³⁴⁾。

12歳になり⁽³⁵⁾、チュウは敢えて (父親の知り合いであった) レェ・コン・スン督夫 (Đốc Phủ Lê Công Xứng) の家に行き、卒業後にはフ

ランス植民地政庁に奉職することを条件に、ミィ・トォの（現在のグウエン・ディン・チュウ (Nguyễn Đình Chiêu) 学校の寄宿生として入学できるよう頼んで身元保証人になってもらった。それに続いて、チュウはサイゴンに上りシャッスル・ローバ (Chasseloup Laubat) (現在のレ・クウィ・ドン (Lê Quý Đôn)) 校で学んだ。

21歳になり、卒業試験に合格し、1899年3月23日、チュウはサイゴンにおけるフランス植民地政庁の入国管理局 (移民局) (sở Tân Đáo (Sở Di Trú)) での仕事に任用された。

財政を学んだ後、チュウは当時ミィ・トォ市場で商売をしていたタン・チ (Thanh Trị) 村のブイ・チ・タン (1879-1955) (Bùi Thị Thân) と結婚した。チュウ夫妻には全部で9人の子供がいた。最初に生まれたゴォ・チ・グウ (Ngô Thị Ngừ) という娘は、ミィ・トォで生まれて5日で亡くなった。次女のゴォ・チ・ホン (Ngô Thị Hồng) はサイゴンで3歳で亡くなった。次の子供たちが続いた。すなわち、三女がゴォ・チ・イェン・ゴック (1904年生れ) (Ngô Thị Yến Ngọc), 四女がゴォ・チ・グェット (1906年5月27日生れ) (Ngô Thị Nguyệt), 5番目の長男がゴォ・ヴァン・ニュット (1908年9月10日生れ) (Ngô Văn Nhựt), 6番目の次男がゴォ・ヴァン・ティン (1910年11月20日生れ) (Ngô Văn Tinh), 7番目の三男がゴォ・トゥオン・ヴァン (1913年9月1日生れ) (Ngô Tường Văn), 8番目の四男がゴォ・タン・フォン (1915年11月15日生れ) (Ngô Thanh Phong), 9番目の五男がゴォ・カイ・ミン (1920年9月9日生れ) (Ngô Khai Minh) であった。

チュウは各子供たちに細かく助言していた。「各子供たちよ父の言い付けたことを思い出しなさい、善良に生活し、実直な商売をしなさい、誰とも揉め事を起こしてはいけません、緑色の薪木にも拘らず食べていかざるを得ないなら、昔から現在まで数十年間変わることのない神仙が代々教えている掟は、人に敗れ劣っても耐え

ろということである。』⁽³⁶⁾ チュウは誰に対しても親愛の情を持って困難な仕事の処理に当たった。自分より地位や財産がずっと少ない人、友人や同門の人にも誠実であり、役所に行かねばならない人を含めて全ての人に適切に対処した。

チュウの妻であるブイ・チ・タン夫人は1955年12月30日に76歳で逝去し、国道1号線からタン・アンのグウエン・フウイン・ドゥック (Nguyễn Huỳnh Đức) 霊廟に入る道脇にある小さな墓地に埋葬された。

チュウは公職にあつては、清廉潔白で、有り余るほどの富はなく、60ドンで1軒の家を買い、修理して瓦屋根の3部屋とした。(周囲の土地は借地であった。) タン・アンのラグランジュ (Lagrange) 通り31番地 (現在はファン・ディン・フン (Phan Đình Phùng) 通り27番地になっている) に家族と暮らすためであった。

1931年、54歳にしてチュウはカン・トォ (Cần Thơ) で休養するために休職した。チュウはカン・トォではいつもグウエン・アン・ニン通り (đường Nguyễn An Ninh) 39番地 (現在はチャウ・ヴァン・リィエム (Châu Văn Liêm) 107番地) のリ・チョン・クウィ (Lý Trọng Quý) 氏の家に滞在した。

1920年にハ・ティエンにおいて仕事をしていた時にカオダイの神を完全に信じ入った時から、1932年に天に帰るまで都合12年間チュウは公務のため転勤が多く、本当に家を離れ愛欲を断ち切り生き生きとして修行に集中していたが、妻子を助けるために毎月給与を引き落として、家庭へ夫として父としての本分を果たしていた。

レ・ヴァン・グウン (Lê Văn Ngung (トゥ・グウン (Tu Ngung)) 氏はチュウが神霊からの教えを学ぶことを助ける童子 (đồng tử)⁽³⁷⁾ となり、チュウが教えを行う期間全てを通して親密な援助者でもあった。

甲子の年 (1924)、フウ・クウオクからサイゴンにもどって、チュウはペルリン (Pellerin) (現在のパストゥール (Pasteur)) 通り54番地の

バ・フエ・ラウ (Bá Huê Lầu) に仮住まいした。その後、何度も宿泊先を変えた。ダ・カオ (Đa Kao) 地区のポール・バール (Paul Bert) 通り (現在はチャン・クワン・カイ (Trần Quang Khải)) にいた時には、チュウは良く近くの玉隍寺 (chùa Ngọc Hoàng) を訪ねたものだった。

サイゴンで仕事をしているこの時期、時おり遠くで修行するため休暇を取って、カンボジアのタ・ロン (Tà Lơn) まで何度か行った。

辛未 (Tân Mùi) の年 (1931)、チュウは生涯の仕事を辞め、カン・トォ (Cần Thơ) で休養するために退いた。その翌年、壬申 (Nhâm Thân) の年 (1932) 3月13日 (西暦1932年4月18日) およそ午後3時に (メコン川前江 (sông Tiền, Cửu Long) ミイ・トゥアン (Mỹ Thuận) 渡船場で、チュウは天に帰った。

ゴォ・ヴァン・チュウの宝塔 (Bửu tháp) は、現在 (カン・トォの) チュウ・ミン・ヴォ・ヴィ派の祖庭の道路を隔てた前に位置するチュウ・ミン墓地 (Chiếu Minh Nghĩa Địa) にある。

2. 内教心傳 (Nội Giáo Tâm Truyền)

内教心傳とはカオダイ教の一般的解釈では、心法秘伝とも言い、心法とは心の修行の方法のことであり教えを練る方法のことであり、秘伝とは他の人に知られないように、秘密の方法でこっそりと伝え渡すことを意味する。それゆえ、心法秘伝とは、「師の心から弟子の心へ秘密のうちに伝える教えの修道法のことである。」⁽³⁸⁾ この修道法を具体的にチュウの事例を通して明らかにする。

i. ミン・ティエン壇, カイ・ケェ壇等でのカウ・コォ (cầu cơ) への参加

父母に対して、チュウは親孝行で従順な息子であった。公職につき収入を得るや否や、父母に孝養を尽くすためにチュウはハノイから父母を迎え、父には金銭を与え、元気な時も病める時も母の面倒を見た。母の病については、神仙に薬の処方を探めに行くことも含めてあらゆる

治療方法を探し、妻子をおろそかにしているとと言われることを躊躇って、自分の手で母の洗濯も行った⁽³⁹⁾。孝の教えから出発し、チュウは母親の病気を治す薬を求めて神仙にお告げを請いカウ・コォに通った。1902年に、トゥ・ヤウ・モット (Thủ Dầu Một) におけるミン・ティエン (Minh Thiện) 壇に仕えたのが、チュウが最初に仕えたカウ・コォであり、その結果チュウは益々心酔して心霊生活に深入りして行くようになった。このことがカオダイの最初の弟子となるための前提であったと思われる。

病に伏す母のためにチュウは薬の処方を神霊に乞うて、ファム・ヴァン・グウ (Phạm Văn Nguru) のカイ・ケェ壇 (đàn Cái Khế) を訪れた際、神仙は、「チュウが菜食をして初めて母親の病は治る」と厳かに見立てを告げた。結局、チュウが菜食したにも拘らず、またチュウがカイ・ケェ壇やミン・ティエン (Minh Thiện) 壇に何度となくカウ・コォを行い神霊の見立てを請うたにも拘らず、1919年にチュウの母は逝去した。

チュウは自らの菜食齋戒が十分でなかったため母が死んだとの自責の念を持ったのではないかと筆者は考えている。それは母の死を継起にチュウは神霊への修行にのめり込んでゆくからであり、翌1920年のカオダイの出現に繋がっているからである。

ii. 修行の為の第1グループの創立

この時、チュウは修行のための一つのグループを創立した。そのグループには、チャン・フォン・サック (Trần Phong Sắc), ドアン・ヴァン・キム (Đoàn Văn Kim), レェ・キエン・トォ (Lê Kiền Tho), グウエン・ヴァン・ヴァン (Nguyễn Văn Vân) が参加した⁽⁴⁰⁾。

レェ・キエン・トォの家で、八仙 (Bát Tiên)⁽⁴¹⁾ を祀り、チュウの家では関聖 (Quan Thánh), 観音 (Quan Âm), 文昌帝君 (Văn Xương Đế Quân) を祀った。このグループは万法帰宗經 (kinh Vạn Pháp Qui Tông) に従ってカウ・コォ

を行い、明聖經 (kinh Minh Thánh) を誦えた。トォが童子 (đồng tử) となり、サックが法師 (Pháp Sư) となった⁽⁴²⁾。いつも、カウ・コォは漢字で記された薬の処方を求めるものであった。グループに参加した各氏は、詩歌を吟じあって仙人に願い事をし、我が身の境遇や事業の好転や薬方の教示を願って天上の仙人の降下を祈るカウ・ティエン (cầu tiên) を楽しみに壇から壇へ旅行していた。このカウ・コォの中で一度カオダイ仙翁 (Cao Đài tiên ông) を称する仙人が現れ、詩を詠んだりもした。そのときはカオダイ仙翁を称するのは中天大廡 (Trung Thiên Đại Mĩ) であるとされた。

これがゴォ・ヴァン・チュウによって組織された最初の修行グループである。それゆえこのグループはカオダイの教えの最初の組織としての性格を持っている。

iii. 壇機の様式の整備とカオダイの出現、そして内教心傳の教え

チュウはカイ・ケェ壇の様式に従ってカウ・コォの方法を整頓した。すなわち壇には、陽の霊媒 (đồng dương), 陰の霊媒 (đồng âm), 法師 (pháp sư), 典記 (điển ký), 読み手 (độc giả) が居る事とした。チュウ自身は読み手となった。すなわち神仙の降した字を読んで表すことをした。

己未の年12月15日 (1920年2月4日) になって、タン・アンの家で最初に壇を立てた中で、カオダイの名を聞くことができた。この降臨のゆえに、チュウは、カオダイの神の最初の弟子といわれるのである。その降臨の中に次の句がある。

《カオダイは衆生の心により姿を変える
それゆえ、誰もカオダイの名を知る者はない》

チュウは上の二つの詩句とは異なったことを記して、後進が引き続き考えて実際の証明をするための「公案」を作り出した。カオダイに関しては多くの呼び方があった。例えて言えば、

カオダイは足りないところのない言い訳であり、天の門であり、崑崙の頂上であり、真霊が人々の真神を操る場所である。もし上の二つの詩句とチュウの教えた下の二つの詩句

《もともと、神仙は決して遠いものではない。

最も仰ぎ見て尊ぶ心があれば、霊は降る。》を結合させると、この詩句は次のようなことを表していると思われる。「(人の精神生活についてお互いに称し方は、心霊、仏性、本性、善性、靈魂...と様々だが) カオダイの真霊は、原始の時代からあり、あらゆる時期の衆生と符合するために活動することを止めてはいない。しかし、生きれば生きるほど、人は益々外側に向かって出てその内側の部分から遠のいてしまうために、普通の人生と符合することができなくなってしまい、心魂と肉体との間が二元の状態になってしまい、人はしばしば不安や心配になったり、冷淡で無関心にすら感じられたりもする。生まれながらに備わっている知恵や人を憐れむ心がすり減らされ、天変地異で数万の生命が奪われでもしない限り、私たちのほとんどはそれほど気にかけていないものである。人は、自らの二元的な状況を認め、混乱して未だに解決方法を見つけない。その成り行きの中で、カオダイの教えは無為の仏道に入る道を提出し、瞑想と修行を実行し、心の内面に入る事を認め、上述した行き詰まった状況から抜け出すために、自分自身の真の霊を探す事を論している。」このような場合になって初めて上記の二句に取り上げられたカオダイの意義を理解するであろうとチュウは考えたものと思われる。

チュウとチュウ・ミンの信徒たちはこの道理を悟って生活している在家の居士であり、汚れを去り心身を清め、欲望を断ち、しっかりと厳しい規定で実直に修行し習うこととしたと思われる。彼らこそが内教心傳の実践者である。それゆえ、数的に発展するために普く救済するという普度の問題は、チュウ・ミン派においてもうちすてる事ができない問題ではあるが、聖地や教座、職色、職事、仕事や作業をするため

の班といった全ての職位や立場も皆、無為を修行する人には全く関係がない。ただ光明の中の気持ちと一着の清潔な白い道服だけで、たとどこでも修行して参禅するために、チュウ・ミン壇に変えることができる。チュウ・ミン派に属する人たちは豊富な心霊生活を送り、その中でゴォ・ミン・チュウは最も象徴的人物であったと思われる。

iv. ハ・ティエンでのダン・コォ (đàn cơ壇機)

1920年3月1日、チュウはハ・ティエンに行き、そこで7ヶ月間仕事をした。この時期チュウはマック・クウ (Mạc Cửu) 村の壇機に参加した。童子 (đồng tử) はラム・タン・ドゥク (Lâm Tấn Đức), ファン・ガン (Phán Ngàn), カオ・ヴァン・ス (Cao Văn Sự) であった。いつも、ルウ・ドン・タン (Lữ Đồng Tân), バック・ハック・ドン・トゥ (Bạch Hạc đồng tử白鶴童子), ミン・グウエト・ドン・トゥ (Minh Nguyệt đồng tử明月童子)・・・らの各神仙が壇に降った。また、そこにはカオダイ仙翁さえもいた。降った神から、これが中国起源のヴェトナム人の壇機であることは明らかであるが、チュウの創設した修行グループが参加したものではない。

v. 修行の為の第2グループの創設

1920年10月16日 チュウはフウ・クウオク島に行き、1924年7月までそこに住んだ。フウ・クウオクにおける手つかずの自然とともにチュウの純朴で人情に厚い筋の通った人柄により、心霊生活と世俗の生活との間や、人間と万物や自然との間の、調和しなければならないゆるがせにできない事を、チュウがいち早く認識する事ができた。この考えを実践するために、チュウ達は静かな心を護って、ゆるがせにできない事など何もなく、投げ捨てねばならないことが必要であり、そうして初めて自分自身の内側からと同じように宇宙から至るメッセージを理解することができる。そのためにはチュウは汚れを去り心身を清める場を実現し、簡素な生活を

し、それぞれのカウ・コォを通して得た神意に従って修行した。この時期、チュウは観音寺 (Chùa Quan Âm) やズウオン・ドン (Đương Đông) 山にあるスン・フン (Sùng Hưng崇興) 寺で、カウ・コォを行った。チュウはここでも修行グループを創設した。そのグループには、バ・ラン (Ba Lang), 郷豪カウ (hương hào Khâu), 教員マン (Mẫn), フォン・ダ (Hương Đa), ビエン・ティ (Biện Tý), バ・ドン (Ba Đồng) のファン委員 (Hội đồng Phan), ナム・ヴァン夫人 (bà Năm Vàng), ファム夫人 (bà phủ Phẩm), ハイ・フィン (Hai Huỳnh), トゥ・スアン (Tư Xuân), トゥ・グン (Tư Ngung), バ・グウオン (Ba Ngươn), ナム・ニョン (Năm Nhon), バ・スアン (Ba Xuân), ムウオイ・ドゥック (Mười Đức)・・・らが参加した。

このチュウの第二グループは明聖經を棄てて、齋戒・菜食して宗教的シンボルを創り始めた。

vi. カオダイ教のシンボル＝「天眼」の創設

1921年2月8日の壇機で、チュウは齋戒・菜食と宗教的シンボルを創る事を決定した。最初、チュウは十字形をシンボルと定めたが、ある宗教が既に使っているため後に神仙の同意を得られなかった。辛酉の年3月13日すなわち1921年4月20日朝6時になって、仙翁が天眼 (Thiên Nhân) と日月星 (Nhật Nguyệt tinh) をチュウに描いてシンボルとして祀るように導いた。チュウの弟子の一人ファム・ヴァン・トイ (Phạm Văn Thới) によれば、まさにクン (Cung) 画家が描いた天眼をトイ氏がなぞったものであった。この時まで、カオダイ仙翁大菩薩マハー・タット (Cao Đài Tiên Ông Đại Bồ Tát Ma Ha Tát) が新たに出現し、各門弟にチュウを師 (Thầy) と呼ぶようにと告げた。1924年になって、チュウは仙人の住む処とされる蓬萊 (Bồng Lai) の景色を見たことを公けにした。即ち、自分で仙人としての悟りの境地を得たことを明らかにしたものとして解される。

このようにして、1921年フウ・クウオク島における第二グループによって、カオダイの教えは神聖なシンボルを持った至高の神のものであり、修行の目的は神仙の住む蓬莱の世界を目指すこととなった。カオダイの教えは、次第に宗教の基本的諸要素を整えたが、完全に整ったというわけではなかった。主に不完全な点は、独創的な独立した教理系統を確立していなかったことにある。この点は、今日に至るまで未だに十分とは言いがたい。

天眼はこれまでになかったチュウのオリジナルな概念ではなく、仏教の六通 (Lục Thông) の一つである。すなわち、天眼通 (Thiên Nhân Thông)、天耳通 (Thiên Nhĩ Thông)、他心通 (Tha Tâm Thông)、宿命通 (Túc Mệnh Thông)、如意通 (Như Ý Thông)、漏尽通 (Lậu Tận Thông) の六神通の一つの一切衆生の過去世 (前世) を知る力である天眼通を意味している。仏教は、六通を神通力の方法と認めているだけで、教理を示したものでもない。しかし、チュウは左眼 (Mắt Trái) は陽であり、天であって、この仏教の基本的な概念に道教の八卦 (Bát Quái) の中の陰陽の概念が入ったものであると解説した⁽⁴³⁾。

至高の神の名には、二つの部分があり、一つは、カオダイ (高臺) 仙翁の四字による道教の範疇に属する部分であり、もう一つは大菩薩マハー・タットの六字によって仏教の範疇に属する部分が示されているということである。実際には六字は、大菩薩という漢字を梵字に音訳したものが後のマハー・タットなので、意味からすると三字に過ぎない。

最初にチュウが十字形をシンボルに選んだ時にはキリスト教の要素を入れるつもりであったにもかかわらず、このようにカオダイ仙翁大菩薩マハー・タットの名号にはキリスト教の要素はなかった。この後に至高の神の名号が、さらに増補された。

vii. 祭壇の配置様式の確立とチュウの第3の信徒グループの形成

1924年7月30日、チュウはサイゴンに戻り商業局第二室で仕事をする事となった。チュウは、ヴァン・クワン・キィ (Vương Quan Kỳ)、視学官ドアン・ヴァン・バン (Đoàn Văn Bản)、中級事務官グウエン・ヴァン・ホアイ (Nguyễn Văn Hoài)、中級事務官グウエン・ヴァン・サン (Nguyễn Văn Sang) と共にヴァン・クワン・キィの家で壇機を立てた。それがカウ・コォ聖室 (thánh thất Cầu Kho) であった。

1924～1926年の間に、チュウはサイゴンで人に知られず控えめに生活していた。日中は南圻総督府で働き、仕事が終わると帰宅して門を閉じていた。チュウはあまり外出することもなく、あまり多くの人と接触せず、まだ新たな教えを普く布教するつもりがないように見えた。後に、機筆に関する識者であるヴァン・クワン・キィやグウエン・フウ・ダックのいる所で、この問題についてお互いに交流したり、休日に一緒にカウ・コォに行ったりもした。ヴァン・クワン・キィは、チュウの真伝による祭祀方法を直接説明して教えることができ、他の各位はキィからすっかり教わるのができた。その後壇が設けられた時には、ドアン・ヴァン・バン視学官やグウエン・ヴァン・ホアイ上級書記官、ヴォ・ヴァン・サン上級書記官の各氏が加わった。しかしその時には未だ入門したわけではなく、ただ畏敬して祭祀に参加したのみである。

チュウは、キィ宅に18cm x 4cmの寸法の祭祀用の板を持って行き、そこに四品を配置した。まず一品は、3杯のグラスに入れた酒と2杯のグラスにいれた真水、それに二つの灯火である。二品目は線香を5本刺した香炉であり、三品目は太極 (Thái Cực) の灯火である。そして四品目が、十字架 (hình Chữ Thập) の下に天眼を含むカオダイ仙翁のシンボルを真ん真ん中に置き、右側には花果を、左側には花瓶を配置した。この祭壇の基本配置は、現在まで保たれてい

る⁽⁴⁴⁾。

ただ十字形は、ゴォ・ヴァン・チュウの位牌の外形の下にチュウ・ミン派 (phái Chiêu Minh) の祭壇の中でだけ用いられている⁽⁴⁵⁾。太極の灯火 (Đèn Thái Cực) は、成果の発展を星図に願い真ん中の頂きに置かれた。このなかで形成されたのがチュウの第三の信徒グループである。当時は、別の各殿や寺の壇機に付属するものではない個人的な壇機のための祭殿があった。カウ・コォのための壇機 (Đàn cơ Cầu Kho) にあっては、カオダイの教えの独立した宗教としての実体が存在し、象徴的に表現されていた。少なくとも内教心傳の概要と様式を統一したことで、チュウはカオダイの教えを創立する使命を形式的には完成させたと言える。

3. サイ・バン (xây bàn) グループの出現

i. A Ấ Ấ の降臨と瑤池宴会礼の創設

1925年7月25日、サイゴンにおいて全く新たな壇機が出現した。カオ・クウイン・クウ (Cao Quỳnh Cư) ファム・コン・タック (Phạm Công Tắc) カオ・ホアイ・サン (Cao Hoài Sang) の壇機である。西洋通霊術 (Thông linh học phương Tây) のサイ・バン (bàn xây) である⁽⁴⁶⁾。このカウ・コォは、最初は失敗ばかりであったが、翌日26日夜になって、二人の人物が機に降った。カオ・クウイン・クウの甥のカオ・クウイン・ルウオン (Cao Quỳnh Lượng) とクウの父カオ・クウイン・トゥアン (Cao Quỳnh Tuấn) であった。

1925年7月30日夜、ドアン・ゴック・クエ (Đoàn Ngọc Quế) 仙女が一編の詩を機に降した。

ドアン・ゴック・クエは実名ヴァウオン・ティ・レエ (Vương Thị Lễ) の墓がサイゴン郊外のフウ・トォ (Phú Thọ) にあることを知らせた。1925年8月1日朝、クウ・タック・サンの三氏はフウ・トォに行き、墓碑と写真のあるヴァウオン・ティ・レエの墓を見つけ出した。三氏はまさにその日の朝カウ・コォを行い、ドアン・ゴック・クエが降って、それが彼女の墓であること

を確認した。

1925年9月2日のサイ・バンによる壇機で、ドアン・ゴック・クエは至高の神 (Đấng Tối Cao) が至ることを伝えた。至高の神は、サイ・バンの壇に降ってア・ア・ア (AẤẤ) の名を称した。

1925年9月18日、クウ・タック・サンの三氏は、ドアン・ゴック・クエに頼って別の神仙が機に降るよう請うた。クエは引き受け、三氏は菜食するように要求した。これによって、三氏は菜食を始めた。この後、多くのサイ・バンの壇機で、異なった詩が唱和された。

1925年9月25日のサイ・バンによる壇機で、ア・ア・アがクウ・タック・サンの三氏に、8月15日に瑤池宴会 (Hội Yến Diêu Trì) を開くべきである事を教えた。この日から、中国神話中の女仙人の瑤池のお嬢さん達 (Diêu Trì nương nương 瑤池娘娘) が盛大に拝まれ、カオダイの大祭日となった。

乙丑の年8月15日 (1925年10月2日)、サイゴンのブルデ通り (đường Bourdais) 134番地にあるカオ・クウイン・クウの家で最初の瑤池宴会礼 (lễ Hội Yến Diêu Trì) が催され、ア・ア・アや瑤池皇后 (Diêu Trì nương nương) や九位仙女 (Cửu vị tiên nương) が機に降った。

ii. ドン・ズウ運動 (phong trào Đông Du) との係り

1925年11月4日、新たな現象が出現した。それは、「ドン・ズウ運動に参加している多くの友人たちが、祖国の将来の運命について尋ねるため三氏のサイ・バンを当てにするようになった」ことである。ニャン・アム・ダォ・チュオン (間陰道長 Đức Nhân Âm Đạo Trưởng) が大変上手な10編の連環詩を降して、愛国的な人々が今活発に議論するために、ほとんど全てを褒めそやして具体的に解説した⁽⁴⁷⁾。今日、ニャン・アム・ダォ・チュオンの10編の詩は、未だ発見されていない。ニャン・アム・ダォ・チュオンの詩の第二句にいささか曖昧ではあるが政治的

な意図がある。クウ・タック・サンの壇機が男女の情愛を題材としたものから愛国精神を題材としたものへ転換した最初のものである。この後、その当時ファム・コン・タックを東遊運動派遣候補者の名前の中に置くようにとの神意があったが、実現することはできなかった。たとえこの神意を確定する事ができなくとも、また1925年11月4日の壇機が、クウ・タック・サンの三氏とドン・ズウ運動との関係の端緒を明らかにしただけであるとしても、この後の日本とクウオン・デェ (Cường Đê) との関係の手掛りとなる表現であった。

1925年11月10日、多くの志士が時局について教えを請うために三氏のサイ・バンを当てにして尋ねた。この機には、レェ・ヴァン・ズウエット (Lê Văn Duyệt) 佐官 (Tà quân) が降り、これらの志士の希望を満足させる応えをした。ただ、その志士たちが誰であるのか名前や年齢を尋ねてはならず、またレェ・ヴァン・ズウエットの応えた内容がどのようなものであったのかも分からない。

この後の1925年11月27日、12月6日、12月13日の各壇機は、元に戻って詩の唱和を題材としたものであった。

iii. 「ヴォン・ティエン・カウ・ダオ (vọng thiên cầu đạo 望天求道)」とダイ・ゴッ・コ (Đại ngọc cơ 大玉機) の使用への転換、それによる玉隍上帝曰高臺仙翁大菩薩マハータット教道南方の降臨

1925年12月15日、詩人ボン・ズィンと六娘との間で詩の唱和を始めた壇機があった。それに引き続いて、「ア・ア・アがクウ・タック・サンの三氏にヴォン・ティエン・カウ・ダオと、ティ氏 (ông Tý) の家に行ってダイ・ゴッ・コを借りねばならないと教えた。」

この壇機には、重要なことが二点ある。一点は、ア・ア・アがクウ・タック・サンに正式に「ヴォン・ティエン・カウ・ダオ (天を望んで道を求める)」を知らせたということであり、

このコ・ブット (cơ bút 機筆) の内容が新たな宗教へ移り変わる転換点であったと思われる。同時に二点目は、西洋方式のサイ・バンの使用が終わり、中国方式のダイ・ゴッ・コの使用に転換したということである。クウ・タック・サングループによる新たなこの時点こそが、新宗教の出現した時でもあると解する外教公傳グループもいる。

翌日の12月16日、直ぐに三氏はダイ・ゴッ・コを使用し、最初に機に降った神仙は、ゴック・ホアン・トゥオン・デェ・ヴィエット・カオ・ダイ・ティエン・オン・ダイ・ボ・タット・マハー・タット・ザオ・ダオ・ナム・フウオン (Ngọc Hoàng Thượng Đế Viết Cao Đài Tiên Ông Đại Bồ Tát Ma ha Tát Giáo Đạo Nam Phương 玉隍上帝曰高臺仙翁大菩薩マハータット教道南方) の名を称した。各氏はこの名号を理解することができず、ア・ア・アに頼って解説してもらわねばならなかった。この後、蓮花 (華) 仙 (Liên Huê (Hoa) Tiên), 妙道天尊 (Diệu Đạo Thiên Tôn), 普賢菩薩 (Phổ Hiền Bồ Tát), 六娘の各神仙が順番に機に降った。

この新たな名号は三つの部分を含んでいる。一つは、ゴック・ホアン・トゥオン・デェであり、イコールの二つ目は、カオ・ダイ・ティエン・オン・ダイ・ボ・タット・マ・ハ・タットであり、これは1921年にゴォ・ヴァン・チュウに降った名号でもある。三つ目は、ザオ・ダオ・ナム・フウオンであり、この神仙の教えを伝えるねらいが南方、すなわちヴェトナムの南国の地であることを示しているだけである。

まず玉隍上帝がいかなる神仙であるのかを考察するに、まさに中国神話における各神仙の最高至上の神仙である。玉隍大帝 (Ngọc Hoàng Đại Đế), ゴック・ホアン (Ngọc Hoàng), ゴック・デェ (Ngọc Đê) とともに称され、まさに道教 (Đạo giáo) における天帝 (Thiên Đế) のことである。新宗教の道教的性質はこのことから明らかであり、道教の中に仏教 (Phật giáo), 儒教 (Nho giáo), 明教 (Minh giáo) の一部が全て含まれ

ている三教混交が反映されているといえよう。

チュウの場合と異なって、この場合は、教主が自らの伝道目的を明らかに述べている。しかしこの時まで玉隍上帝とア・ア・アが依然として未だに合一したままであることに留意する必要がある。1925年12月19日、12月20日、12月24日の各壇機の中で、ア・ア・アが玉隍上帝に隣り合って出現していた。1925年12月30日の壇機に至って、「カオダイ上帝が降り、まさに自らがア・ア・アである」ことを告げた。

このようにして、クウ・タック・サン（クウ・タック・サン）の壇機は三つの点で転換を果たした。一つは、情愛的な題材から政治的な題材へ転換したことであり、二つは、ア・ア・アによる情愛的詩の唱和から玉隍上帝による教えへの転換であり、三つは、西洋神霊学 (Thông linh học phương Tây) のサイ・パンの使用から当時南部で普及しつつあった中国方式の大玉機を使用した壇機に転換したことである。

玉隍上帝が最初に教理を説いたのは、1925年12月24日 (キリスト教の降誕祭 (Lễ Giáng Sinh) 夜の壇機の機筆においてであった⁽⁴⁸⁾。機筆はヴェトナム語でなされ、この後のカオダイの各文献は多少異なっている場合もあるが、ヴェトナム語で発表された。この時の機筆の句の中の12の大文字は、玉隍上帝の最初の12人の門弟の名⁽⁴⁹⁾であった。チュウ (Chiêu), キィ (Kỳ), チュン (Trung), ホアイ (Hoài), バン (Bản), サン (Sang), クィ (Qui), ジャン (Giăng), ハウ (Hầu), ドウック (Đức), タック (Tắc), クウ (Cu) のことであり、最後の句の中の斜字体の三文字は壇に仕えた3人、クウオン (Quờn), ミン (Minh), マン (Mân) のことである。

この機筆がクリスマスに降されたことは、道教や仏教の性質と隣り合ったキリスト教の性質が、クウ・タック・サン（クウ・タック・サン）の壇機の中にあらわされていると思われる。また、カオダイ教タイニン派の聖典『タイン・ゴン・ヒエップ・トゥエン (Thánh Ngôn Hiệp Tuyển)』はこの教えか

ら始まる。

4. カオダイ教の統合と分裂

カオダイの教えは上述した二つの起源が合わさったものからなっている。一つの起源は、ゴォ・ヴァン・チュウの壇機である。二つ目の起源はクウ・タック・サン（クウ・タック・サン）の壇機である。この二つの起源が互いに独立して活動した。ゴォ・ヴァン・チュウの壇機は世に出て、カオダイ仙翁が1920年 (資料によっては1919年) から出現した。一方、1925年からクウ・タック・サン（クウ・タック・サン）の壇機が新たに活動を始め、1925年12月になって初めてカオダイ仙翁の名号が正式に出現した。1924年7月30日、ゴォ・ヴァン・チュウがサイゴンに転勤になり、その後でカウ・コォ聖室が建てられた。

クウ・タック・サン（クウ・タック・サン）の壇機には、1925年7月25日に至って、大玉機を用いずにサイ・パン（サイ・パン）で初めて活動を開始した。この事はクウ・タック・サン（クウ・タック・サン）が明清壇機 (đàn cơ Minh Thanh) の影響より、フランス神霊学 (thông linh học Pháp) の直接の影響を大きく受けていることを明らかにしている。当時、サイゴンでは大玉機を用いた壇機がかなり普及しており、メコンデルタの全平野部でも同様と思われる。そのためサイ・パン（サイ・パン）を用いた後に、クウ・タック・サン（クウ・タック・サン）のグループは大玉機を用いた壇機に転換したと思われる。

カウ・コォ聖室もカオダイの教えに至高の神がおり、神聖なシンボルがあり、教会があったが、見棄てた明聖の教理問答集 (kinh bốn Minh Thánh) に代わる明白な教理を形成してはいなかった。

乙丑の年12月末になって、カオダイ仙翁の聖なる命令に従って、チュウはサイゴンにおけるフォ・ロアン・グループであるチュン、クウ、タック、サン、ハウ、ドウクの各氏に天眼の描き方と祭祀方式を指導した。このことは、カウ・コォ聖室にクウ・タック・サン・グループが至尊の名号からシンボル、祭祀方法に至るまで、すなわち天眼や太極等々に至るまで、

チュウの壇機の宗教的成果を継承したことを意味している。たとえ玉隍上帝の名を提出したとしてもクウ・タック・サンの壇機は依然としてチュウが長兄であることを受け入れざるを得なかった。ここに至って、二つのグループが合わさり、カオダイ仙翁の最初の12弟子が誕生したのである。その故にこそ1925年12月24日の弟子の名前の筆頭にはチュウの名が記されているのである。

1925年大晦日の夜、チュウはクウやタックと一緒に上記の各位を訪ね初春を祝い、その後でレ・ヴァン・チュンの家に戻り壇を立てた。カオダイの神が降り、次のように諭した。

「弟子達よ、聴きなさい。チュウが衆生を救済するための教えを伝えることを承諾する前に、今日我がすべての門弟を道德の道に導き悪くならないようにして、それを達成する時まで指導者とするという言葉を持ち所としなければならない。私たちに代わって彼らを教え導かなばならない。」

チュウは1933年までに新たな教えを形成することを申し上げた。コツコツと音を立てるサイバンによる機が、「よい」と応えた。しかし、その後でカオダイの神は、「チュン、キィ、ホアイの3人はチュウに代わって人々を救済することに気を配らねばならない。聴いて、遵守しなさい。バン、サン、ジャン、クィは自らの道德を整えるよう気を配り、衆生のために布教しなさい。聴いて、遵守しなさい。ダックはチュンを助けて、この動きに合わせて一つとしなければなりません。聴いて、遵守しなさい。(ダックは、はい先生、ミン・リィ会に穏やかに心を配るよう補います) 後で師の責めにはいけない。機を習い、機の練習に仕え、その後で何人かの方に従って人々を救済しなさい。聴いて、遵守しなさい。」⁽⁵⁰⁾と続けた。

これは重要な聖言であり、丙寅の年正月一日子の刻(1926年2月12日)に降され、開道の命令と同じ日である。正月9日(1926年2月20日)を通して、キィは自宅で壇を開いた。この時カ

オダイの神が機を降して、次のように諭された。

「小枝は自分自身の各弟子が師を主としたうえで、各弟子が理解をするであろう。師は各弟子達がお互いに思い調和することを嬉しく思う、これは師のために献じる重要な祭礼である。師の教えの名に心を配らねばならない。師の教えとは即ち各弟子のことであり、各弟子は即ち師のことである。お互いに影響しあっているのかもしれない、敵意を持って争ってはいけない。各弟子は自分のなすべき務めを大切にして師の望む意にそうようにしなさい。」と和を説いた。

春季に入った壇で、師は花について、小枝の芽吹きについて言及し、「それは自然のもの凄い規律であって、たとえどれほど多くの枝でありどれほど多くの小枝であっても、一本の木にまとめられている。この木こそが師の教えであり、道德であり、まさに各弟子達のことであり」と諭された。この教えのことは、教えに関する変事を予言したようなものでもあり、広く分布した教理についての各子供たちへの父親の心情を表したことばのようでもある。しかし、ヴェトナム人には特別に深遠なものであったものと推察される。それは孝-和の道理であり祖父母や父母や祖先に対する孝であり、兄弟姉妹に対する和順である。ここにおいて兄弟姉妹は家族や血族だけを指しているのではなく、村や国や同じカオダイ教徒の世界へ拡張していくとの考えである。カオダイの信徒にとってこのような聖なる教えのことは父母が子供に教え諭すことに近いものか、同じようなものであったと思われる。そのため、教えに帰依する全ての人を説得することのできる内容と思われた。まさに変事を予見するように、たった3ヶ月後に無為と普度は二つの枝に分かれた。ここではチュウと最初に枝分かれしたチュウ・ミン・ヴォ・ヴィについて述べる。チュウが、世間においてカオダイの神に代わって指導する教宗の職を受けられなかった時、チュウは後輩が新たな教えを発展することを導いた。チュウのこの行動についてはいろいろな意見があった。しかしこのこと

は何ら奇妙なことではなく、チュウの生きた思想と哲理のなせる業であろう。

このようにカオダイの教えは、フランス植民地政権の下級役人や知識階層によって、明清壇機の肥沃な耕作地の上に芽生えたと言って良いと思う。

まさにこの二つの要素は、統一のために互いに尋ねあい、そこから新しい一つの宗教が形成されたのである。

5. チュウ・ミン派の分派

チュウは責任を放棄することなく、離れて分派する日であった丙寅の年3月14日(1926年4月24日)までだけのみの伝道に賛成しないことを具体的に行動で示した。

カオダイ教創立者であるゴォ・ヴァン・チュウの名はカオダイ教の創立署名者28名の中にない。そのことは、チュウの思いとは別にキィ、ホアイ、サン、タックらとの決裂が開道準備以前に決定的であったことを意味する。すなわち、「カン・トォ (Cần Thơ) におけるゴォ・ヴァン・チュウのチュウ・ミン派 (Phái Chiêu Minh) は、カオダイ教の開道の5ヶ月以上前、統一13人集会のわずか3ヶ月後の1926年4月12日から分派した。

チュウとともに教えを学びたいと希望した人が多くいたが、チュウは皆断った。後に、サイゴンで書記であったレェ・ヴァン・フアン (Lê Văn Huân)⁽⁵¹⁾が第2期の肺結核の病に侵され治る見込みが極めて難しくなった時、チュウはフアンのために病を治して教えを伝えた。フアンは面倒を見てもらうことができ、チュウの最初の弟子となった。

その他には、フゥ・ラム壇 (đàn Phú Lâm) においてチュウもグウエン・ヴァン・ムウオイ (Nguyễn Văn Mười), グウエン・ヴァン・ズウオン (Nguyễn Văn Dương), ファム・ヴァン・トイ (Phạm Văn Thái) 各夫妻のために教えを解説し、後にそこにズウオン・ヴァン・チョイ (Dương Văn Chai) 夫妻、ライ・ヴァン・ヴィ (Lại

Văn Vui) 氏...も加わった。カン・トォのチュウ・ミン壇にあってはグウエン・ミン・フウイン (Nguyễn Minh Huỳnh) やグウエン・ティエン・ニイエム (Nguyễn Thiện Niệm) が最初の弟子として受け入れられた。それに続いたのはトゥ・フウイン (Tư Huỳnh) 女史、トム委員女史 (bà Hội đồng Thơm), ニイエム女史 (bà Niệm), グウエン・ミン・トゥオン (Nguyễn Minh Thương) 夫妻がブイ・ミン・フイ、ブイ・ハ・タン氏がいて、その中にはブイ・ミン・フイ (Bùi Minh Huy) 委員がおり、後に悟りを得た時得度して恵命金仙 (Huệ Mạng Kim Tiên) となった。ブイ・ハ・タン (Bùi Hà Thanh) 氏はゴォ氏に直接教えを得て、校長にもなった人である。

現在、チュウ・ミン無為派の信徒数に関して正確な統計値は未だないが、特殊であるため多い数ではない。大多数の信徒たちは高齢であり、若い者は多くない。

カオダイ仙翁はキィ、バの教えの組織を開き、無為の教えの法からはじめて自らの最初の弟子であるゴォ・ミン・チュウに任せて掌握した。

カオダイ教の起源について細かく調べるなら、まさにゴォ・ヴァン・チュウが創立者であり、またカオダイ教の各信徒の言葉に従うなら、例えゴォ・ヴァン・チュウが開道の式典に参加していなくとも、それでもなお教宗 (Giáo Tông) に封ぜられてしかるべきであり、チュウは教宗の式服を (sắc phục) を一揃い持っていたが着ることはなかった。だが、チュウの仕立てた一揃いの式服は、教宗以上のためのものであった。レェ・ヴァン・チュン (Lê Văn Trung) は、ただ教宗権にあるのみで、壇機の世界ではすぐに李白 (Lý Bạch) が教宗となってしまった。このことこそチュウの先駆的役割についての雄弁な証左である。それゆえに、ゴォ・ヴァン・チュウは、他の各壇機 (đàn cơ) と和合することなく、自らの宗教的基盤を「しっかりと大切にする (vẫn giữ)」ことによって正しくないことから「分かれ出る (tách ra)」

ことを告げたのである。』⁽⁵²⁾とある。無為の部分と普度の部分は決して統合されたわけではなかったことを明かしている。なかでもカオダイの最初の弟子でありながら、教宗の式服を用意しながら、その地位に就くことのなかったことが、大きな統合の障害となっている中で、カオダイ教の宗教法人としての組織化が進められたことが知れるが、この間の経緯に関する評価は、その立場によって変わるので、分派したチュウ・ミン・ヴォ・ヴィについては後考を俟つ。

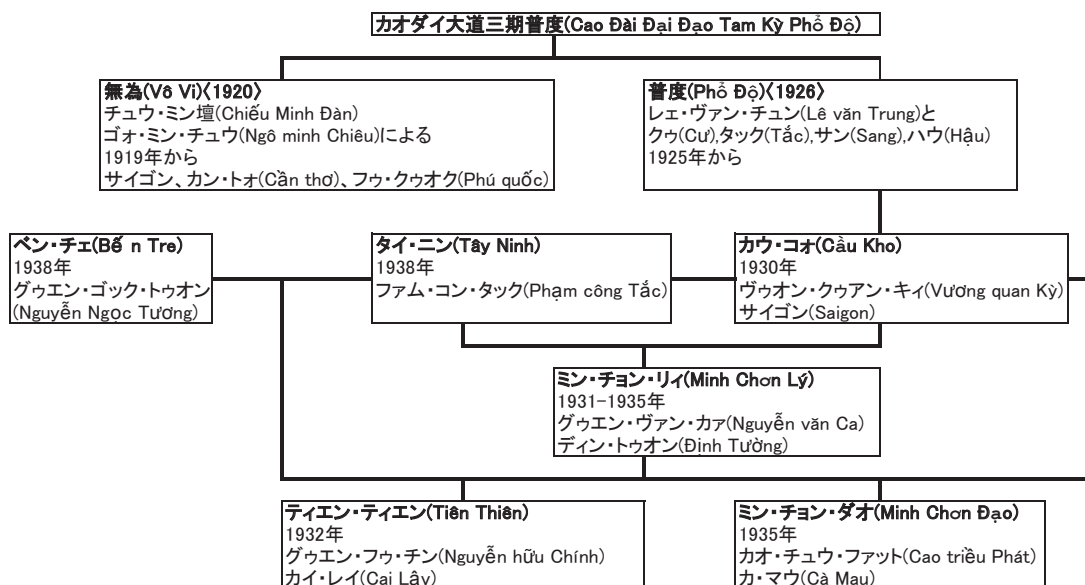
おわりに

1. カオダイ教は儒・仏・道・キリスト教・イスラーム等を含むユニバーサルな宗教としての特徴を持っているが、この特徴はヴェトナム南部の在地的な宗教環境の反映によるもので、その意味ではカオダイ教は優れてヴェトナム南部の在地的な宗教である
2. カオダイ教の揺籃期には、ゴォ・ヴァン・チュウが瞑想や修行を通して蓬莱の世界に至る無為の道を拓き、それを内教心傳と解した。一方、個人の悟りによる救済を追い求めるのではなく、望天求道により普く救済する道を求めるファム・コン・タックらの普度の道を外教公傳として、対峙させ止揚したものがカオダイの教えであると解釈したものと思われる。ただ、歴史的な事実としては、ゴォ・ヴァン・チュウは教宗とならなかっただけでなく、カオダイ教団創設趣意書の28人の中にも入っていない。さらに、教団の開道札にも呼ばれていないことは否定しようがない。この事実を、仏教における上座部（小乗）仏教と大衆部（大乘）仏教の対立に類似したものとも解釈できると筆者は考えている。この類比の中で、上座部（小乗）に比されるのは無為であり、大衆部（大乘）に比されるのは普度であろう。その解釈を基にすると、チュウが死んだ後もチュウ・ミン派の壇に降って教えた内容をまとめたものが『大乘真教 (Đại Thừa Chơn Giáo)』というチュウ・ミン・ヴォ・ヴィ

派の聖典であることは、些かアイロニカルである。次に、教宗権をレ・ヴァン・チュンに付与しながら、教団の創設が認可されると、壇機の心霊世界で降る教宗は李白に代わり、実質的な教宗権は形骸化されていく。更に、壇機に降る心霊には正邪が入り混じっていることを理由に壇機を立てることを制限し、壇機の霊媒の組織である協天台の護法の地位にファム・コン・タックが就き、壇機の解釈権を恣にする。それを、物理的に固定化したものがタイニン正座の建設であり、教義解釈の独占のために壇機による神意を『聖言協選』として刊行し、併せて『法正伝注解 (Pháp Chánh Truyền Chú Giải)』、『新律 (Tân Luật)』、『李教宗の八道議定 (Bát Đạo Nghị Định của Đức Lý Giáo Tông)』等を『聖書』にまとめて固定化したのではなかったのか、そのように解すると、創設当初からの分派についても整合性がとれるようにも思う。ただ、ゴォ・ヴァン・チュウを教宗の地位から降ろして、神秘の教えに封じ込めて、教団権力の掌握を図ったのも、カオダイの神意であったとするのが、大衆部（大乘）仏教国ヴェトナムの特徴である。

3. 初期カオダイ教の爆発的拡大の背景に、ミン・スウやミン・タンなどの扶乩や明清壇機により神意を識る新興文化があることをカオ・ファム・グループはいち早く見抜き、フォ・ロアンから大玉機に神意を伺う方法を変えたとともに、瑤池金母信仰をカオダイ教の中に取り込むことで、社会的アノミーにゆれる社会層を信徒とし得た。
4. カウ・ティエンや壇機のテーマを、情愛を謳い唱和するものから政治的な内容に変えることで南部民衆の民族的な抗仏感情を受け入れ、信徒の拡大を図った。

以上4点を本小稿の結論とするが、細かい点は本文に委ねた。また、内教心傳と外教公傳という対比はカオダイ教全宗派の解釈のためのロジックであって、カオダイ教の時期や立場に



出典：Đồng Tân: Tìm Hiểu Đạo Cao Đài hay Giải Đáp 231 Câu Phỏng Vấn của Giới Trí Thức Đại Học Quốc Tế Về Đạo Cao Đài, Cao Hiền Xuất Bản, Saigon ,1974 p.68

図 カオダイ教創設期の部派・宗派の関連

表2 1919年からのカオダイ教創生期の主な事柄

年	事柄
1919	タン・アン (Tân An) において, 最初にカオダイの名を称す
1920	フウ・クウオク (Phủ quốc) において, ゴォ・ミン・チュウに教えを諭し始めた
1925	フォ・ロアン (phò loan) グループがサイゴンで形成された
1926	(宗教法人) カオダイ教が成立する 無為の部分は, 救済を選ぶ機を始め 普度の部分は, 人類全てに公開する政体を立て始めた。
1927	タイニン (Tây ninh) に聖地 (Thánh địa) の中心 が成立
1930	ヴウオン・クワン・キィ (Vương quan Kỳ) によってカウ・コォー (Cầu kho) 派が成立
1931	グウエン・ヴァン・カ (Nguyễn Văn Ca) によってミン・チョン・リィ (Mình chơn lý) 派が成立し, 真伝を失う1935年まで続く
1932	グウエン・フウ・チン (Nguyễn hữu Chính) とレェ・キム・ティ (Lê kim Ty) によってティエン・ティエン (Tiên thiên) 派が成立
1935	グウエン・ゴック・ティエウ (Nguyễn ngọc Thiệu) とカオ・チュウ・ファット (Cao triều Phát) によってミン・チョン・ダオ (Mình chơn đạo) 派が成立
1938	タイニンとベン・チェ (Bến tre) にカオダイ聖会 (Hội Thánh Cao Đài) が二派成立した ・ファム・コン・タック (Phạm công Tắc) によるタイニン派 ・グウエン・ゴック・トゥオン (Nguyễn ngọc Tương) によるベン・チェ派
1945	ダ・ナン (Đà nẵng) にカオダイ伝教聖会 (Hội Thánh Truyền Giáo Cao Đài) が, 支派としてではなく別聖会として形成された

出典：Đồng Tân : Tìm Hiểu Đạo Cao Đài hay giải đáp 231 câu phỏng vấn của giới trí thức đại học quốc tế về đạo Cao đài, Cao Hiền xuất bản,1974, pp.28-29



写真1 フウ・クウオクの靈道極聖室
(筆者撮影)



写真2 カン・トォのカオダイ聖会チュウ・ミン・ヴォ・ヴィ派祖庭にある祭壇 (筆者撮影)



写真3 カン・トォ郊外、カオダイ聖会チュウ・ミン・ロン・チャウ派の祭壇 (筆者撮影)

表3 カオダイ教揺籃期の歴史的事項

西暦年月日	陰暦の年月日	重要事項
1920		上帝 (Thượng Đế) が, ゴォ・ヴァン・チュウの家での壇に降る中で初めてカオダイの名号を称した
1921		カオダイは, 最初の弟子であるゴォ・ヴァン・チュウ, すなわちゴォ・ミン・チュウが「無為の機 (cơ vô vi)」の指導者になり, 禅定修行の秘法を授ける事ができることを受け入れた。
1925		カオダイは, カオ・クウイン・クウ (Cao Quỳnh Cư), カオ・ホアイ・サン (Cao Hoài Sang), ファム・コン・タック (Phạm Công Tắc) を受け入れ, 1926年1月18日にレェ・ヴァン・チュン (Lê Văn Trung) が弟子となり「普度の機 (cơ phổ độ)」を始める事を受け入れた。
1926年2月12日	丙寅の年の除夜	12人の弟子が, カオダイの命令によって最初に集まった。
1926年9月29日	丙寅の年8月23日	当時の政権に「宗教法人設立申請書 (lập tờ Khai Tịch Đạo)」を送り届けた。
1926年11月19日	丙寅の年10月15日	「大道開明礼 (lễ Khai Minh Đại Đạo)」を行い, 最初のカオダイの職色の各位が職位に就いた。
1926年11月20日	丙寅の年10月16日	カオダイが, 『九重台法正伝 (Pháp Chánh Truyền Cửu Trung Đài)』を授けた。
1927年1月16日	丙寅の年12月13日	カオダイが, 『新律 (Tân Luật Cao Đài)』をつくり終える。
1927年2月12日	丁卯の年1月11日	カオダイが, 『女派法正伝 (Pháp Chánh Truyền Nữ Phái)』を授けた。
1927年2月13日	丁卯の年1月12日	カオダイが, 『協天台法正伝 (Pháp Chánh Truyền Hiệp Thiên Đài)』を授けた。
1927年3月12日	丁卯の年2月9日	聖会 (Hội Thánh) がゴォ・ケン (Gò Kén) の慈林寺 (Tứ Lâm Tự) からタイニン省ロン・タン村 (làng Long Thành) に移り, ここに聖座 (Toà Thánh) を建設し, 1953年になって完成した。
1930年4月3日	甲午の年3月5日	ゴォ・ミン・チュウがこの世にあって教えを成就した。
1932年4月18日	壬申の年3月13日	ゴォ氏は, (メコン川) 前江を渡し船で渡っている時, 15時に教えを終えて, 他界した。
1936年	丙子の年	カオダイが, 大乘真教経 (kinh Đại Thừa Chơn Giáo) を通して大乘心法 (Đại Thừa Tâm Pháp) を授けた。

出典：Đại Đạo Tam Kỳ Phổ Độ Cơ Quan Phổ Thông Giáo Lý Đại Đạo：Tìm Hiểu Tôn Giáo Cao Đài, Nhà Xuất Bản Tôn Giáo, 2009, Hà Nội, pp.43-44

よって全く逆な解釈も成り立ち得ることを付言しておく。カオダイ聖会チュウ・ミン・ヴォ・ヴィ派のカン・トォにある本部には、解放戦争期における勲記や社会貢献に対する彰状等が所狭しと掲げられているからである。

<注>

- (1) カオダイ教の聖典に関する一連の拙稿は、高津 茂 (2010)「近世ヴェトナムの「万教合一論」ーカオダイ教聖典『聖言 (Thanh Ngon)』についての基礎的考察 (1)ー」, (日本共生科学会)『共生科学』第1巻 2010, p.109の注を参照, カオダイ教の各宗派、特にその形成過程に関する一連の拙稿については、高津 茂 (2016)「ヴウオン・クワン・キィとカオダイ・カウ・コー聖室の形成過程」, 『(東洋大学) アジア文化研究所研究年報』第51号, pp.188-189の注を参照。
- (2) 高津 茂 (2011)「二つの抗戦期に見るカオダイ教タイニン聖座派と愛国諸派の民族的共生への動きの対比」, 『共生科学』第2巻pp.109-122
- (3) 高津 茂 (2015)「カオダイ教におけるフォ・ロアンとサイ・バンーカオダイ教形成過程におけるサイ・バンを中心としてー」, (京都大学人文科学研究所)『人文学報』第108号, pp.127-141
- (4) 発起人28名の名前と当時の社会的立場については、Đại Đạo Tâm Kỳ Phổ Độ, Cơ Quan Phổ Thông Giáo Lý Đại Đạo : Lịch Sử Đạo Cao Đài , Quyển I, KHAI ĐẠO. Từ Khởi Nguyên Đến Khai Minh, Nhà Xuất Bản Tôn Giáo, 2005, 【以下, KHAI ĐẠOと略す】 pp.291-293を参照
- (5) ĐỨC NGUYỄN編『高臺詞典 (CAO ĐÀI TỪ ĐIỂN) [Dictionary of Caodaism, Dictionnaire du Caodaïsme, Giáo lý - Triết lý - Danh nhân Thành ngữ - Điển tích』, ĐẠO LỊCH 74 - Canh Thìn - 2000, Cập nhật ngày : 29-10-2012 <http://caodaism.org/CaoDaiTuDien/cdtd-mucluc.htm> (2017年9月19日)によれば、「内教無為-外教公傳」として、たとえどのような宗教であろうとも、皆二つの部分がある。一つは秘法の部

分であり、いわゆる内教無為である。もう一つは体法の部分であり、いわゆる外教公傳である。と説明している。

- (6) 石井米雄監修, 編者 桜井由躬雄, 桃木至朗『【東南アジアを知るシリーズ】ベトナムの事典』, 同朋舎, 1999, 95頁「カオダイきょう カオダイ教」の項には「1926年, 南部のタイニン省でレー・ヴァン・チュンらにより創始された。」とある。
- (7) Victor L. Oliver : 'Caodai Spiritism A Study of Religion in Vietnamese Society', E.J.Brill, Leiden, 1976
- (8) Jayne Susan Werner : 'Peasant Politics and Religious Sectarianism : Peasant and Priest in the Cao Dai in Viet Nam', Monograph Series No.23/ Yale University Southeast Asia Studies, New Haven, 1981
- (9) 'Lịch Sử Quan Phủ NGÔ VĂN CHIÊU (1878-1932) Người sáng lập Đạo Cao Đài', In Lần Thứ Tư, Nhà In Trần Minh Châu, Saigon, 1956 【以下, NGÔ VĂN CHIÊU 1956と略す】
- (10) Cao Đài Đại Đạo Chiêu Minh Tam Thanh Vô Vi : 'Lịch Sử Quan Phủ NGÔ VĂN CHIÊU (1878-1932) , Nhà Xuất Bản Tôn Giáo, Hà Nội, 2007
- (11) Huệ Khải : Ngô Văn Chiêu Người Môn Đệ Cao Đài Đầu Tiên, Nhà Xuất Bản Tôn Giáo, Hà Nội, 2008
- (12) Đồng Tân : Lịch Sử Cao Đài Đại Đạo Tâm Kỳ Phổ Độ, Quyển I , Phần Vô Vi (1920-1932) , Cao Hiền Xuất Bản, Saigon, 1967 【以下, Đồng Tân 1967と略す】
- (13) KHAI ĐẠO (注iv参照)
- (14) Đồng Tân : Tìm Hiểu Đạo Cao Đài hay Giải Đáp 231 Câu Phong Vấn của Giới Trí Thức Đại Học Quốc Tế Về Đạo Cao Đài, Cao Hiền Xuất Bản, Saigon, 1974
- (15) Lê Anh Dũng : Lịch Sử Đạo Cao Đài Thời Kỳ Tiềm Ẩn 1920-1926, Nhà Thuận Hoá, Huế, 1996 【以下 Lê Anh Dũng 1996と略す】
- (16) Trung Tâm Khoa Học Xã Hội và Nhân Văn Quốc

- Gia, Viện Nghiên Cứu Tôn Giáo ; Bước Đầu Tìm Hiểu Đạo Cao Đài, Nhà Xuất Bản Khoa Học Xã Hội, Hà Nội, 1995, 【以下, Tìm Hiểu, 1995と略す】
- (17) 『大南一統志』「邊和省」建置沿革の項によれば, 「邊和蓋古婆利國, 後爲真臘婆地全泥之地。太尊孝哲皇帝己未三十二年 (1679), 故明鎮守高雷廉楊彥迪等歸附, 以高蛮國之東浦地處之, 闢地立甫, 蔚有華風。顯尊孝明皇帝戊寅八年 (1698), 命掌奇阮有鏡經略高蛮, 以鹿野處, 即全泥, 清人曰農耐, 爲福隆縣, 置鎮邊營, 國初凡界首曰鎮, 鎮辺属嘉定省, 募募廣平以內流民居之, 分置村邑, 其清人流寓者, (以下略)」とある。
- (18) Trương Minh Đạt : Nghiên Cứu Hà Tiên, Nhà Xuất Bản Trẻ, HCM, 2008
- (19) 『大南一統志』「河僊省」建地沿革によると, 「國初, 清廣東人鄭玖南來, 寓高蛮, 見芒地有諸國商人湊集, 因招集流民於富國香澳瀝架奇毛等處, 社自管轄, 以所居相傳常有僊人出沒于河上, 因號河仙國。(以下略)」とある。
- (20) Huệ Khải : Đất Nam Kỳ Tiền Đề Văn Hoá Mở Đạo Cao Đài, Nhà xuất bản Tôn Giáo, Hà Nội, 2008
- (21) 高津 茂 (1980) 「阮朝初期国家祭祀の一考察」, 東洋大学アジア・アフリカ文化研究所『研究年報』通巻第15号, 31頁
- (22) Trung Tâm Khoa Học Xã Hội và Nhân Văn Quốc Gia, Viện Thông Tin Khoa Học Xã Hội : Thư Mục Thần Tích Thần Sắc, 1997
- (23) 高田 洋子 『メコンデルタの大土地所有 無主の土地から多民族社会へフランス植民地主義の80年』, 京都大学出版会, 2014, p.94
- (24) Tìm Hiểu, 1995, pp.88-89
- (25) LÊ ANH DŨNG, 1996, pp.40-41
- (26) Huệ Khải : Tam Giáo Việt Nam Tiền Đề Tư Tưởng Mở Đạo Cao Đài, Nhà xuất bản Tôn Giáo, Hà Nội, 2010
- (27) 高津 茂 (2012) 「ヴェトナム南部メコン・デルタにおける五支明道とカオダイ教」, 星槎大学紀要『共生科学研究』No.8, 26-44頁
- (28) Tìm Hiểu, 1995, p.99によると, 閔聖殿は, 「1873年に建てられた」とある。
- (29) 2月8日誕生を記しているのは, KHAI ĐẠO, p.348。2月28日誕生日を記しているのは, NGÔ VĂN CHIÊU 1956, p.6, や Đồng Tân 1967, p.42 や Tìm Hiểu, 1995, p.99 等であり, 両日併記してあるのが, Huệ Khải : Ngô Văn Chiêu, p.8 等がある。
- (30) Tìm Hiểu, 1995, p.99 によると, 「チュウの父ゴォ・ヴァン・スゥアンは, フェ朝廷の侍郎が南に下って転居した一人であった。スゥアンはビン・テイ精米所の女性労働者の一人ラム・ティ・クウィと縁を結んだ。1875年頃にサイゴンのホア・フン (Hoà Hưng) に至った。」とある。
- (31) Phạm Bích Hợp : Người Nam Bộ và Tôn Giáo Bản Địa, Nhà xuất bản Tôn giáo, Hà Nội, 2007, 【以下, Phạm Bích Hợp と略す。】 pp.192-193 には次のエピソードが紹介されている。「幼い時から, チュウは同じ年頃の子たちとは異なっていた。というのは, 乳を吸うのを拒んで重湯を飲むのみで, すぐに粥を食べ, その後は米を食べるようになった。」
- (32) 他の多くの資料が6歳であるが, Tìm Hiểu, 1995, p.99 によると, 「1885年 (7歳) の時に, 父母はハ・ノイに行き」とある。満年齢か数え年かの違いと思われる。
- (33) Tìm Hiểu, 1995, p.99 によると, 「ダイ叔母さんの夫は漢方薬を商っている明郷 (Minh Hương) の一人であった。」とある。
- (34) Phạm Bích Hợp, p.193 には幼少期のチュウの信仰基盤として次の記述がある。「昔の資料によると, 「叔母の家に居た時から学校へ行き, チュウは閔聖帝君を祀る小さな棚の仕度をする継父の真似をしていた。叔母や継父の前では菓子パンを食べたりしていたが, それは仏前に灯す灯明や焚く香を買う一部に注意を払ってもらうためであった。夜に課題を学び終わると, チュウは経を読み, 寝るまで祀り拝んだ。」
- (35) 他の多くの資料が12歳であるが, Tìm Hiểu, 1995, p.99 によると, 「1888年 (10歳) の時, チュウは, 卒業したら必ずフランス政府のための仕事に就くという条件で, ミイ・トォ高等小学校に入り, ミイ・トォ・カレッジ, シャッスル・ロー

- バに進んだ。」とある。
- (36) Phạm Bích Hợp, p.194
- (37) 降霊の際に霊媒の役を担う。高津2010参照
- (38) 注v参照。
- (39) Phạm Bích Hợp, p.193
- (40) KHAI ĐẠO, pp.63-64
- (41) Tim Hiểu, 1995, p.101の脚注によれば, 「八仙とは8人の仙人のこと。すなわち, リイ・コン・ティエット・クァ (Lý Công Thiết Quả李鉄拐), ホン・チュン・リ (Hồn Chung Ly漢鍾離), ルウ・コン・ドン・タン (Lữ Công Đồng Tân呂洞賓), ハン・トゥオン・トゥ (Hàng Tương Từ韓湘子), タオ・コン・クウオク・クウ (Tào Công Quốc Cự曹国舅), ラム・テェ・ホア (Lâm Thê Hoà藍采和), チュオン・クウア・ラオ (Trương Quả Lão張果老), ドン・ハイ・バ (Đông Hải Bá何仙姑)」。
- (42) 注1参照
- (43) 天眼の意義については, 特にカオダイ・チュウ・ミン派の「無為法門」の教えとの関わりについては, Phạm Bích Hợp, pp.198-201に詳しい。
- (44) Đại Đạo Tam Kỳ Phổ Độ, Cơ Quan Phổ Thông Giáo Lý Đại Đạo : Tim Hiểu Tôn Giáo Cao Đài, Nhà Xuất Bản Tôn Giáo, Hà Nội, 2009, p.66-69
- (45) 写真2・3参照
- (46) 注3参照
- (47) Tim Hiểu, 1995, pp.109-110
- (48) 注1にこの時降された詩の全訳がある。
- (49) Đồng Tân 1967, p.99に別の詩の中で13人の弟子を紹介している。

1. ゴォ・ミン・チュウ (Ngô minh Chiêu), 督夫 (Đốc phủ)
2. ヴウオン・クウアン・キイ (Vương quan Kỳ), 知府 (Tri phủ)
3. レェ・ヴァン・チュン (Lê Văn Trung), 元上議員 (Cựu Thượng nghị viên)
4. グウエン・ヴァン・ホアイ (Nguyễn Văn Hoài), 通訳 (Thông phán)
5. ドアン・ヴァン・バン (Đoàn Văn Bản), 督学 (Đốc học)
6. ヴォ・ヴァン・サン (Võ Văn Sang), 通訳

7. リイ・チョン・クイ (Lý trọng Quý), 通訳
 8. レェ・ヴァン・ジャン (Lê Văn Giảng), 書記 (Thư ký)
 9. グウエン・チュン・ハウ (Nguyễn trung Hậu), 督学事実 (Đốc học TƯ thực)
 10. チュオン・フウ・ドゥク (Trương hữu Đức), 書記
 11. ファム・コン・タック, 書記
 12. カオ・クウイン・ク, 書記
 13. カオ・ホアイ・サン 書記
- (50) Phạm Bích Hợp, p.203
- (51) KHAI ĐẠO, p.219, Phạm Bích Hợp, p.205
- (52) Tim Hiểu, 1995, p.132

(客員研究員)

About Ngo Van Chieu and the Caodai Esotericism

TAKATSU Shigeru

Abstract ; In this paper, I follow the history of the first disciples of Caodai, Ngo Van Chieu, for clarify the process to establish the Caodaism. On the practice of Cau Co séance, Chieu find the teachings of idleness and the practice of meditation is the only way to self relief. Through the other Xay Ban séance at Saigon, the Xay Ban group established the Caodai religious body for the purpose of saving the world. I draw the characteristic of the Caodai Esotericism of the period of 1920-1926 years and demonstrated the history of the Caodaism infancy.

Key words: Ngo Van Chieu, Ngo Minh Chieu, Caodaism, Caodai Chieu Minh Vo Vi, Caodai Esotericism,